

九州以北に住むチョウ愛好家が沖縄や八重山諸島を初めて訪れた場合、一度の訪問で全域を回りきるのは容易でないことを考慮して、二、三度くらいは、普段みることのない種類がわんさかと飛んでいることから、少々はねが傷んでいようが次々と現れるチョウたちを夢中で追いかけてしまうのだが、石垣島や竹富島を訪れたあと、まずネットを振る対象ではなくなる筆頭のチョウ、それがスジグロカバマダラである。筆者も沖縄本島でのチョウタイムを初経験した1993年、ここまできたのなら石垣島まではどうしても行ってみたい、そんな気になって、日程を追加して石垣島まで足を伸ばし、本島ではみられなかったメスアカムラサキに出会えるなど、やはり八重山はちがうと実感した。そのとき、バナナ公園で初めて目にしたスジグロカバマダラの鮮やかなオレンジにも歓喜して追い回したわけだが、シロノセンダングサが咲く公園裏道に踏み込んだとたん、そのオレンジがあたり一面、いたるところでふわふわと舞っており、初回訪問時から、新鮮度の高いきれいな個体をじっくり観察してネットを振るていどで、滞在二日目からは見向きもしなくなる。そうはいつでも、きれいであることには変わりなく、カメラやビデオを活用するようになってからは、毎回今度こそは気に入ったスナップをとチャレンジする撮影対象にはなってくれる（画像は2012年12月与那国島での記録）。



図鑑によれば、幼虫がガガイモ科のリュウキュウガシワを食べるといいますが、20回以上も通いながら、不勉強のためにその植物がどのようなものかさえ分からなく卵や幼虫をみたことはない。2003年11月、竹富島でいついってもスジグロカバマダラが乱舞する光景に出会える草道へと歩を進めたとき、なぜかあまりに個体数が少なく、一体なぜ？とさらに進んだ先で草道沿いに深く広く繁っていた林がすっかり切り開かれ、根こそぎとなった木々が散乱する情景に出くわして意気消沈してしまったが、あの林にはリュウキュウガシワもいっぱいあったに違いない。スジグロカバマダラなどのマダラチョウ類は、その食草中の毒性成分をうまく取り込んで鳥などの天敵に抗しており、食草さえあればいくらでも子孫繁栄できるチョウなのに、それが奪われると、あっという間に個体数を激減させてしまう。竹富島の無残な姿が目に見え込んできたとき、それはまさに環境破壊がチョウの発生に及ぼす影響の実態を見せ付けられた瞬間であった。きっと牧草地にでもしてしまうのだろう、そう思わせたのだが翌2004年9月訪問時の409八重山蝶紀行には以下のように記載している。

「9月15日、石垣空港へと着陸態勢に入ったジェット機が竹富島をくっきりと俯瞰できるコースをとってくれたことで、昨年11月に無惨に切り開かれていた広い樹林帯の一角がどうなっているのかと注意してみたのだが、広い肌地も、そこに何かを建造したような形跡もなく、思ったより緑が濃い草地として復活しているように見えたのでその場所に行ってみる。どうやら草道の右側一帯に広がっていた深い樹林帯が自然に任せているうちにあまりに鬱蒼と繁りすぎたため一気に切り開き、伐採後はそのまま自然放置するという形をとったらしく、樹木の数が激減した以外には、緑濃い草原という状況に復帰できていることを知ってほっとする。」

妻が初めて同行してくれた2005年9月の竹富島浜辺では、モンパノキの果汁に群がるスジグロカバマダラとカバマダラを見つけ、木をゆすって驚かせることで、たちまちチョウの乱舞状態となるさまをビデオにも記録して楽しんだ。

